



西高新聞

NAGASAKI NISHI INFORMATION

第305号
令和7年9月30日 発行
編集責任者 初村 一郎
http://www.nagasaki-nishi.ed.jp

信頼され続ける学校 学びがいのある学校 居場所のある学校

校長室から

「おもしろ算」

校長 初村 一郎

全校生徒832名が、気持ちを一つにして新たな装いで創り上げた運動会。これからの新人戦や総文祭、そして大学受験に向けて弾みをつける素晴らしい祭典になりました。生徒たちは、ここで得た感動と大きな達成感、満足感を原動力に、今後ますます成長してくれるものと確信します。ご参観いただいた皆様方のご厚情に支えられ、盛会のうちに終了できましたことに改めてお礼申し上げます。

今や、世の中はAI（人工知能）の時代に突入し、職場環境が爆発的に変化していています。一説によると、現在ある職業の約半数は人工知能とロボットで行われるようになるそうです。寂しさというか虚しさが募るのは私だけでしょうか。

それでは、AI社会ではどういう分野の人材が必要とされるのか。1つ目が介護福祉、接客、癒し関連、医療、教員などの人間対人間の高度なサービスを要する分野、2つ目がダンサー、ミュージシャン、画家、スポーツ選手、タレントなどのクリエイティブな分野、3つ目がデータ分析／予測に基づき判断をする分野などと言われています。

マニュアル化し安全性を担保できる仕事は、AIとロボットに代替される時代が変わっていくのは間違いありません。AIにお任せの未来に我々はどう向き合っていくべきなのか。機械に代行させてはならない我々の役割と責任は何なのか。

例えば、医療現場では、人の生死にかかわるのでミスが許されません。数値を入力すれば、薬剤が調合される時代ですが、その調合のミスを機械は判断できません。ミスを感じ取る力があるのは人間だけです。

極端な話ですが、例えば、機械は「 $4 + 2 \times 3$ 」を素早く計算して、10と導き出します。期待できる結果はそれ以上でもなければそれ以下でもない。与えられた規則に従って、素っ気なく提示するだけです。

この「+」、「-」、「 $\times$ 」、「 $\div$ 」を日常の生活に置き換えて考えてみます。「+」は助け合う。「-」は引き受ける。「 $\times$ 」は声を掛け合う。「 $\div$ 」は分かち合う。とすれば、どうなるか。

「助け合う」より「声を掛け合う」を先にするという決まりはなく、どこからやっても答えに誤りはありません。困っている人がいれば、周りにいる皆で助け合い、互いに声を掛け合い、頼まれたことは笑顔で引き受け、喜びも悲しみも分かち合う。

形式ばらず、心を通い合わせ、思いやりを持って生活することが、我々だけに与えられた恩恵であり、『おもしろ算』にあふれる社会を大切にすることが我々の役割であり、責任であると考えます。そのことを忘れることなく、AIと付き合っていきたいものです。

西高の日 SSH校内研究発表会 7月25日（金）

ベネックス長崎ブリックホールを発表会場に、3年生による課題研究のポスター発表が行われました。合計73本の研究発表に対して、SSH運営指導委員の先生方をはじめ、長崎大学より12名の先生方や博士課程の学生・留学生、長崎総合科学大学より5名の修士課程・学部の学生、長崎県内の高校の先生方8名、県立学校のALT6名、長崎市の小中学校のALT10名など、多くの先生方から研究発表の見学や審査をしていただきました。発表した3年生は日本語で発表をしつつも、ALTや大学教授の先生方に対しては、英語による発表を行い、質疑にも即時的に対応するなど、培われた英語運用能力がいたるところで発揮されました。閉会式では、SSH運営指導委員の長崎県立大学 教授 倉橋拓也 先生より講評をいただきました。想像以上に中学生や保護者の見学者が多く、ポスターが見にくかったり、発表が聞き取りづらかったりなど、課題も見受けられたので、次年度に向けて改善を行っていきます。



【SSH企画推進部主任 小佐々 恵輔】

オーストラリア語学研修 7月28日（月）～8月4日（月）

7月28日から8月4日までの8日間、2年生を対象としたオーストラリア語学研修を実施しました。長崎を出発し、香港を経由してシドニーへと到着。到着後、まず目に飛び込んできたのは、青い空と青い海に映えるシドニー・オペラハウスでした。その壮大な姿に生徒たちは感嘆の声を上げ、異国の地に降り立った実感を新たにしました。

その後、シドニー名物のフィッシュ&チップスを味わい、いよいよホストファミリーとの対面です。初めてのホームステイに緊張の面持ちを浮かべる生徒もいましたが、温かく迎えてくださるホストの笑顔に、次第に安心した様子が見られました。

2日目からは本格的な語学研修が始まりました。全て英語で進む授業に戸惑い、思うように言葉が出てこない場面もありましたが、仲間と励まし合いながら一生懸命に取り組む姿が印象的でした。授業の合間には現地の生徒と交流する機会もあり、異文化に触れることで新たな発見や学びを得ていました。

週末はホストファミリーと一日を過ごしました。ショッピングやボウリング、近郊の観光など、それぞれの家庭で多彩な体験をさせていただきました。生徒たちは英語での会話に苦労しながらも、自分の思いを伝えることの大切さを実感し、ホストファミリーとの交流を心から楽しんでいました。

8月4日、充実した日々を終えた生徒たちは帰国しました。慣れない環境での生活や言語の壁に挑戦した経験は、大きな自信となったはずです。この研修を通して学んだ国際理解や自立心を、今後の学校生活にも生かしてほしいと思います。



【2学年主任 浦 史子】

平和学習会・瓊中慰霊祭 8月9日（土）

6月24日（火）に事前学習会を次のとおり実施し、感想文や俳句・短歌・漢詩などの作品としてまとめました。

- 1年：DVD「少女たちが見つめた長崎」視聴
- 2年：原爆資料館の見学
- 3年：市内の被爆遺構巡り

8月9日（土）の平和学習会では代表作品の発表と、本校の前身にあたる旧制県立瓊浦中学校同窓生で瓊中翠巒(すいらん)会の世話人であられる丸田和男様によるビデオレター講演を実施しました。平和学習を通して生徒は平和の大切さについて理解を深めました。その後、本校会議室(※)で旧制瓊浦中の慰霊祭が執り行われました。同窓生の方々の思いは深く、厳かな雰囲気で行われました。(※今年は雨天、熱中症対策として慰霊祭を屋内で実施。)

【教務部 中尾 賢治】

welcome party

ディランC.ライス君がアメリカから留学生として西高にやってきました。彼はアメリカの学校で写真部に所属していたこともあり、本校写真部にも入部することとなりました。先日、ささやかながら写真部でwelcome partyを開きました。長崎の名所の写真を用いた神経衰弱を通して、長崎の魅力を伝えたり、部員の趣味や好みなどをクイズ形式にしたりして交流を深めました。皆、積極的にディラン君と交流し、ディラン君自身もとても楽しんでいる様子で仲が深まったことと思います。これから、約一年間、さまざまな活動を共にし、たくさんの思い出を作っていきたいです。



【写真部部長 安藝 万由香】

《ディラン君からひと言》

The welcome party was very fun and made me feel like an accepted member of the school, thank you. -Dylan Rice

〔歓迎会はとても楽しくて、学校のメンバーに受け入れられたように感じました、ありがとう。〕

令和7年度 運動会 9月2日(火)

今年度、運動会実行委員長を務めました野口桜太郎です。今年度の運動会は、本校初の室内開催という歴史的出来事(?)となりました。限られたスペースを逆に取り、騎馬戦や部活動対抗リレー、大玉送りなど新たな競技を導入。結果、体育館はまるでライブ会場のような熱気に包まれました。大玉送りでは予想外の方に転がる玉を追って全員が右往左往。騎馬戦にいたっては、誰が武将で誰が足軽なのか分からないほどの盛り上がりでした。可愛らしく、また微笑ましいパレードや息の揃った応援合戦、そして運動会の最後を締めくくったのが全校生徒での円陣。笑いすぎて腹筋が筋肉痛になった人もいれば、声を張りすぎて翌日授業で声が出なかった人もいたとかいれないとか。それでも、全員が本気で楽しんだ時間は確かに青春そのものでした。勝敗の記憶は薄れても、「あの時の笑い声と汗」は絶対に忘れません。今年の運動会は、間違いなく“伝説”として語り継がれる一日になりました。

【実行委員長 野口 桜太郎】



今年の本校の運動会は何といっても初の室内開催。本校初の試みで、その中で班長を務めるというのは正直不安でした。本格的に運動会の準備が始まると、当初は私の力量不足から、スケジュールの伝達などがスムーズにいかず、青組の皆さんには迷惑をかけてばかりでした。しかし、その逆境を乗り越えるべく、多くの仲間にも助けられながら自分なりに工夫を重ね、ようやく本番当日を迎えました。午前の部終了時の得点では青組が大差での最下位で、このまま終わってしまうのではないかと焦りましたが、午後の部で怒涛の追い上げを見せ、惜しくも一点差で準優勝！青組の団結力を強く感じました。最初に室内開催を聞いたときは正直残念だと思っていましたが、体調に配慮されたアリーナ、色別のTシャツで埋まった観客席、そしてアリーナ中に響き渡る歓声を目の当たりにして、高校最後の運動会が室内開催でよかったと心から思えました。最後に、運営をしてくれた生徒の皆さん、先生方、そして支えてくれた生徒の皆さん、本当にありがとうございました。

【青班班長 中村 拓翔】



「黄光疾走」、この黄組のテーマを決めてから運動会当日に至るまではあっという間でした。班長になってまず最初の集まりでは、他の団の班長も皆顔見知りで安心し、みんなと一緒に運動会を盛り上げていけると思いました。でも、班長の仕事はもちろん簡単なものではなく、悩むことも苦労することも多くありました。これだけ多くの人の前に立って指示を出したり、説明をしたりするのはとても大変でしたが、最終的には班長をやってよかったと心から思っています。また、応援活動も大切な思い出です。本番では全員が自信を持って演舞に臨むことができた結果、優勝を勝ち取ることができたと思います。学校生活で最も楽しい時間を過ごせて幸せでした。また、さまざまなことに協力してくれた実行委員をはじめ、団長、副班長、マスコット、パレード、競技の責任者、体育委員、先生方に心から感謝します。本当にありがとうございました。



【黄班班長 本村 悠隼】

白団のテーマである西天白日を考えてから当日まであっという間でした。まず最初の選手宣誓はぐだぐだで、セリフを忘れてしまったり、最後にノリツッコミをしたりと本当に恥ずかしかったです。3年生の楽しみである「もし教」では、みんながセンスのある格好をして、特に4組は備蓄米をテーマに時事ネタを扱って多くの保護者の方を笑顔にさせることができたと思います。応援団では団長を中心にさまざまなことがありましたが、最後は一致団結し、最高の演技をすることができました。結果は功を奏しませんでしたでしたが楽しかったです。最後は山口くんの男泣きでしたが、カッコいいですね！！今年からの新たな取り組みとして部活動対抗リレーがありましたが、面白枠では創造性溢れるパフォーマンスもあり、本気枠では部活動の威信をかけたパチパチの争いで面白かったです。総合優勝を逃したことは悔しかったのですが、皆さんが本当に楽しかったと言ってくれていて本当に嬉しかったです。今回の運動会を通してさまざまな経験ができて本当に楽しかったです。来年の運動会をもっと盛り上げるように頑張ってください。ありがとうございました。

【白班班長 井口 貴一】



自分はこの運動会で班長として班をまとめる責任を担いました。最初は、自分がどのようにしたら良いかわからず色々と迷惑をかけたこともあるかと思います。それでもついてきてくれてありがとうございます。赤団のみなさんの支えがあってこそやってこれたと思います。横断幕、パレード、応援団、団体競技全てが本当に素晴らしかったです。結果よりも、仲間を応援する声、みなさんの全力で競技に挑む姿、競技が終わった後の笑顔、本当にやってきてよかったなと思える瞬間でした。みなさんと切磋琢磨して運動会を創りあげたこの1ヶ月は本当に最高でした。この経験を今後の人生に生かしていきたいです。そして、今年は初の体育館開催となり、どうなるのか分からない部分もありましたが、先生方のご支援により無事運動会を終えることができました。本当にありがとうございました。最後に保護者の皆様、お忙しい中、足を運んでいただき、多くの声援を送ってください、本当にありがとうございました。

【赤班班長 河邊 克】

